

「いてもたってもいられなくて、被災地へ行きました。こんな大災害の時に私たちができることはこれだけです」。松尾美山起先生は、1月17日に起こった阪神大震災の5日目に現地へ出向いた。「感心したのは被災者同士の連帯感と協力体制。共に支えあう。これは医療の原点であり、診療活動での連携の大切さにも通じることを改めて感じました」。

1985年10月1日、松尾クリニックを開業。以来9年間、在宅医療と患者志向の診療活動に取り組んできた。中でも昨年10月に開放型病院が八尾市で初めて承認されたことが、1つのエポックである。「描いていたモチーフがやっと形となった感じ」。それというのも、承認の許諾にかかわらず、以前からその病院まで入院中の患者を診るため、クリニック出勤前の7時過ぎに通っていたからだ。

知人からは「そこまでしなくても」と言われたが、「患者さんにとっては急激な環境の変化で不安がある。また、慢性の病気は継続的に見ていくことが重要。病院に任せっきりは病態が分かりません。医師として常に新しい情報を得て、勉強する努力は当たり前だと思うのです」。患者からは「入院した者にとって、先生の顔を見るととてもホッとするとされている。「私にとって開放型病院が認められたのは、単に保険点数の有無の違いだけ。でも、診療行為が評価されたのは嬉しい」。

一方、かねてから望む病診連携や診診連携、そして福祉・行政、ボランティアとの連携など、本当の意味での地域の医療ネットワークの第一歩となる可能性が見えてきたことも嬉しいという。みんなで在宅患者を支えたいという先生は、すでに診診連携も実践中だ。在宅患者25人のうち、遠方に住む2人についてはその患者宅に最も近い開業医と連携し、

人ひと

Document '95

在宅医療の経験生かし 地震の被災地へも急行



松尾クリニック院長
松尾美山起先生

「元気の源？ それは患者さんと話すこと。在宅医療では患者の人生そのものに触れている。これからは多方面での連携が確立することを望んでいます」

まつお・みゆき

1948年（昭和23年）大阪生まれ。73年3月広島大学医学部卒業、同年淀川キリスト教病院で1年間全科を研修し、翌年から内科勤務。78年八尾徳州会病院勤務。専門は循環器。85年に松尾クリニックを開業。夫君は汎（ひろし）氏（現国立循環器病センター心臓血管内科医長）。

ダブルで往診。松尾先生は負担が減り、患者にとっては近所の医師にも診てもらえる安心感が生まれた。医師間では受け持つ病状を役割分担することで、診療内容の重複を避けている。点と点がつながり、小さな線ができた。草の根運動的に一步一步ネットワークが築いていければと願う。

松尾先生は開業当初から自動車電話やポケットベル、そして携帯電話を常備。24時間体制で「いつでもお電話ください」と患者にダイヤルを教えている。子どもと映画を見ていてベルが鳴り、子どもを連れてかけつけたこともある。これまでに受け持った在宅患者は140人。そのうち11人が寝たきり状態から回復した。

また、松尾クリニックで特筆したいのは患者の会「松樹会」の活動ぶりだ。開業1年後に患者から「気軽に話し合える会があれば」と持ちかけられた。早速声をかけると、70～80人が集まった。以来、年に3回の例会と日帰り旅行を催し、「松樹会ニュース」を年4～5回発行する。例会では講演会や作品展のほか、忘年会を兼ねたパーティーなどで、グループ活動の演劇、コーラス発表がある。いずれも患者同士の大きな楽しみとなっている。「日帰り旅行では、皆さんの健康は私が守ります！と一言で看護婦さんたちと一緒にバスに乗り込み、喜ばれていますね」。

小柄な松尾先生のどこにこれだけのパワーが潜んでいるのだろうか。「私は疲れていても患者さんと接していると元気が出てくるんです」。9年前にB型肝炎にかかり生死をさまよったが「こんなことで死んではいられない」と、夫君の助けを受け全快した。時間は自分で作るもの、と忙しい診療の合間をぬいながらジャズソングを習い、患者と演劇練習を続けている……。